

学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー (1)

一場所を表す「に」と「で」の場合一

迫田 久美子

A Language Processing Strategy that Produces Learners' Errors —The Case of 'NI' and 'DE' Showing Location—

Kumiko SAKODA

1 はじめに

第二言語学習者間には、母語の違いにかかわらず同種の誤用が見られることから、学習者には共通の言語体系が存在すると言われ、母語とも目標言語とも異なっているとすると言語体系は「中間言語」と呼ばれるようになった。その後、中間言語体系の全体像を明らかにするために習得過程の研究が盛んになり、誤用も含めた中間言語のバリエーションは極めて体系的であることが明らかになっている。日本でも、習得過程の解明を目標として中間言語研究が行われるようになり、最近では文法の習得だけでなく、社会言語学や語用論などの分野においても盛んに研究が行われている。

しかし、従来の研究では誤用の分類や誤用・正用の頻度による量的分析、テストや発話データの結果報告が多く、なぜそのような結果になるのかという考察が乏しい。さらに、得られた結果に基づいて誤用の原因解明まで言及している研究は少ないのが現状である。

そこで、本研究は場所を表す格助詞「に」と「で」を取り上げ、以下の課題を明らかにする。

- ① 日本語学習者の「に」と「で」の使い分けにおいて、母語の影響はあるのか。
- ② 「に」と「で」の誤用には、どのような要因が考えられるのか。
- ③ 誤用を産み出す原因として、どのような学習者のストラテジーが考えられるのか。

2 「に」と「で」の習得に関する先行研究

日本語学習者にとって格助詞は誤用の頻度が高く、中でも場所を表す「に」・「で」に関しては学習が

進んでも誤用が多く観察され、習得の困難な項目の1つとなっている(石田 1991, 八木 1996)。「に」と「で」の使い分けに注目して言及している研究に関しては、英語母語話者を対象として縦断的研究を行った久保田(1994)井内(1994)、多国籍の学習者の作文資料を対象とした福間(1997)などの研究があり、いずれも「に」と「で」の間で(1)に示するような誤選択が多いことが報告されている。(一)による訂正は筆者。

- (1) a. *横浜で (一に) 遊びに行きました。
(久保田 1994: 82)
- b. *1時PARCOまえに (一で) 会いましょう。
(井内 1994: 40)
- c. *いま私は留学生かい館で (一に) すんでいます。
(福間 1997: 67)

久保田(1994)と井内(1994)は、非漢字圏の初級学習者(久保田は2名・井内は4名)を対象に助詞の習得研究を行っている。久保田(1994)は1年10ヶ月、井内(1994)は1年4ヶ月の縦断的研究を行い、共にテストや日記などの書き資料、タスクによる発話資料を分析の対象とした。また、福間(1997)は非漢字圏の19名の作文に現われた「に」の誤用を対象として、研究を行っている。さまざまな「に」の用法別に教科書の提出順序との関係から結果を分析している点は興味深い。

上記、3件の先行研究の結果をまとめると、(2)となる。

- (2) a. いずれの研究においても場所を表す「で」と「に」の混同が著しい。
- b. 「で」を使用すべき場合に「に」を使用する

(以下、「でーに」の誤用とする) 誤用から「に」の過剰般化¹(例*食堂にごはんを食べます)が見られる。(久保田 1994)

- c. 「へーで」の誤用(例*新宿で遊びに行きます)が多い。(井内 1994)
- d. 「でーに」の誤用も「にーで」の誤用も共に観察される。(井内 1994)
- e. 学習前半(0~3ヶ月)では「にーで」、後半(4~6ヶ月)では「でーに」の誤用が多い。(福間 1994)

これらの結果に対して、久保田(1994)は文型との、福間(1997)は教科書における提出順序との関連から考察を行っている。

久保田(1994)は、基本文型の格助詞の使用状況を分析し、「[場所]へ・・・を[目的]に行く」の文型では「*銀座で映画を見に行く」のような「へーで」という誤用が多かったこと、「映画を見に銀座へ行く」のように動詞「行く」と場所「銀座」が近ければ「へ」が正しく選択されていることから、「へ」と「で」の誤用の原因が動詞との距離が遠いことに因ると指摘している。文型との関連や動詞との距離については、新たな観点の分析として評価できるが、なぜ動詞との距離が遠いと「で」が選択されるのかについては、「at」を「で」と考えた可能性もあるという母語からの言語転移を示唆しているだけで、詳しい考察はなされていない。

福間(1997)は、学習3ヶ月以降「でーに」の誤用が増加する点について存在構文の「〜に・・・います」(4課)、「〜に住んでいます」(8課)を学習した後で、「〜で遊んでいます」(13課)が提出されるため、「に」と「で」の混同が起きて、「*〜に遊んでいます」のように「でーに」の誤用が起きると述べている。しかし、この考察は「でーに」の誤用に対しての説明にはなっているが、学習3ヶ月以前の「にーで」の誤用に対しては、提出順序でどのように説明するのか明らかにしていない。さらに、もし「〜にいます」を「〜います」と混同し、存在構文と同様に考えて「に」にする誤用が多いとするなら、論文中の誤用「*いま私は留学生かい館ですんでいます。」、「*いま大学でともだちがたくさんいます。」が、「で」を使用して誤用になっていることの説明がつかない。

いずれも動詞や提出順序との関連で助詞の誤用を分析している点は、これまでの報告中心であった習得研究と比べて新たな観点を示したと言える。しか

しながら、「に」と「で」の誤用の原因解明にまではいたっていない。

3 「に」と「で」の使い分けに関する仮説

迫田(1998)は、中国語話者3名と韓国語話者3名に対して、日本語の指示詞コ・ソ・アの習得過程の解明を目的として、3年間の縦断的研究を行った²。調査は4ヶ月毎にテーマを設定し、1時間の対話調査を行った。その自由会話の文字化資料において、場所を表す格助詞「に」と「で」の誤用例を調べた結果、(3)のような誤用が学習者の母語の違いにかかわらず出現していること((3a.~c.参照)、また時間が経過して学習レベルが上がっても同様の誤用が依然として観察されること((3d.e.参照))が分かった。

- (3) a. *○○さんの方は、田舎で(一に)20年間、私は都会で(一に)20年間いると(性格が)違うですよ
(韓国語話者、女性、学習暦 8ヶ月)
- b. * (高校の時の先生は)学校、大学、出っ、すぐ、学校で(一に)勤めて・・・
(中国語話者、女性、学習暦 8ヶ月)
- c. *~デート、んー、さそう、電話の中に(一で)言います
(中国語話者、女性、学習暦 8ヶ月)
- d. *家で(一に)、カラオケ、機械、あったよ
(中国語話者、女性、学習暦 2年4ヶ月)
- e. *映画館、美術館、何もかも全部、日本と他の国、地方で(一に)ありますよね
(韓国語話者、女性、学習暦 2年8ヶ月)

これらの誤用は先述の先行研究でも同様の例が観察されている。では、なぜ場所に関して、ある場合には「に」が選択され、ある場合には「で」が選択されるのだろうか。

迫田(1998)は、指示詞コ・ソ・アで最も学習困難なソ系指示詞とア系指示詞の使い分けは接続する名詞と関係があり、ある習得段階において学習者はソとアの指示詞に関して「そんな+こと」「あの+人」などの語の固まりで使用している可能性がある³と報告している。「に」と「で」の使い分けもコ・ソ・アと同様に近接の語との固まりで処理している可能性が推測される。そこで、寺村(1990)、福間(1997)、市川(1997)の誤用例と迫田(1998)の正用・誤用

例を収集し、接続している名詞で分類した。(4)にその一部を示す。「寺」は寺村(1990)、「福」は福間(1997)、「市」は市川(1997)、「迫」は迫田(1998)の出典を表し、正用例が見られた場合は○、誤用例の場合は●、「—」は文献に提示されていなかった場合、および出現しなかった場合を示す⁴。[]は筆者による補足を示す。尚、誤用部分の表記は太字下線に統一した。誤用例の()は出典と国籍を示す。

(4)の表を見ると、学習者の母語の違いにかかわらず、「に」と「で」の誤用例に関して1つの特徴的な傾向が見られる。つまり、位置を示す名詞(うしろ・中・前)と地名や建物を示す名詞(食堂・大学)と

で違いがあり、前者には「に」が選択されやすく、後者には「で」が選択されやすいことが分かる。このことから、学習者が無意識に名詞と助詞で固まりを形成するストラテジーをとっているということが考えられる。そこで、本研究では学習者の「に」と「で」の使い分けは(5)のような規則性のある固まりで言語処理されているという仮説を立て、その検証を行う。

(5) 位置を示す名詞(例 中・前)＋に
例 *門の前に話をしました。
地名や建物を示す名詞⁵(例 東京・食堂)＋で
例 *東京で住んでいます⁶。

(4) 先行研究における「に」と「で」を含んだ名詞句の正用・誤用例の出現

助詞	文献句	文 献				誤 用 例
		寺	福	市	迫	
に	うしろに	—	●	—	○	*テレビの <u>うしろ</u> にまどです。 (福間 1997: 69 不明)
	となりに	—	●	—	—	*わたしの <u>へや</u> の <u>となり</u> にピーターさんの <u>へや</u> です。 (福間 同上)
	中に	●	●	●	●	* <u>その中</u> に印象的だったのは清水寺でした。 (市川 1997: 238 不明)
	前に	●	—	●	—	* <u>たばこ屋の前</u> に会うように言って下さい。 (市川 1997: 238 アメリカ)
	〈地名〉に	●	●	—	○	* <u>ネパール</u> に今は今も90%の人口は農業～。 (福間 1997: 69 不明)
	田舎に	—	—	—	—	
	食堂に	—	—	—	—	
	大学に	●	—	—	●	大学に <u>試験</u> をうけておどり [おち] ました。 (迫田 1998: 326 韓国)
で	うしろで	—	—	—	—	
	となりで	—	●	—	—	*私は日本人の <u>となり</u> ですわっていました。 (福間 1997: 67 不明)
	中で	●	—	—	○	*部屋の中 <u>で</u> 、こたつとベッドがあります。 (寺村 1990: 234 インド)
	前で	—	—	—	—	
	〈地名〉で	●	●	●	●	* <u>東京</u> で住んでいます。 (迫田 1998: 382 中国)
	田舎で	—	—	●	●	* <u>タイ</u> では病院があるんで [です] けど、いなか <u>で</u> あまりありません。 (市川 1997: 244 タイ)
	食堂で	—	—	●	○	* <u>食堂</u> でごはんを食べに行きます。 (市川 1997: 244 タイ)
	大学で	●	●	●	—	*今、 <u>大学</u> で友達がたくさんいます。 (福間 1997: 67 不明)

4 「に」と「で」の使い分けの調査

4-1 調査の対象⁷

被験者は日本語教育機関で学習している中級レベルの留学生であり、中国語話者、韓国語話者、その他の言語話者の3グループである。各グループはそれぞれ20人で、計60人を対象とした。平均学習歴、平均滞日歴などは(6)の通りである。

(6) 調査対象者の内訳

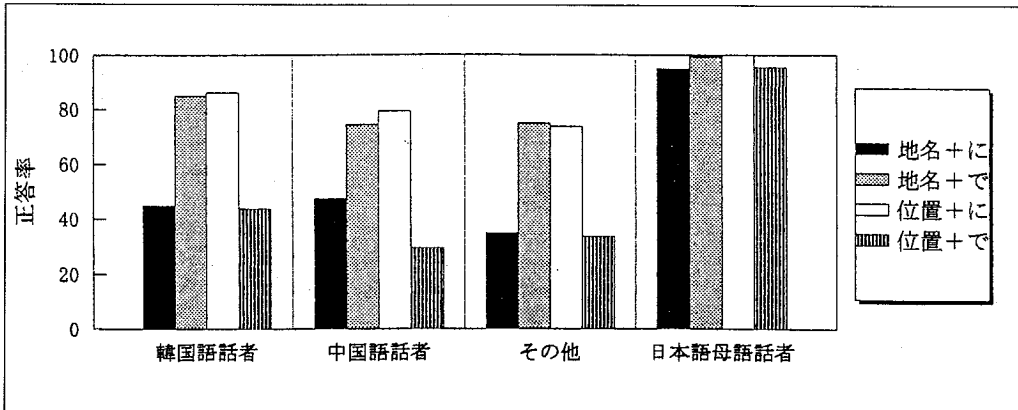
被験者	平均学習歴	平均滞日歴	年齢
中国語話者	1.49(年)	1.26(年)	20~40(代)
韓国語話者	1.46	1.38	20~40
その他 ⁸	1.66	1.45	20~40
日本人	-	-	20~50

4-2 調査の方法

調査方法は、33文から成る49問の穴埋め問題を「に」「で」「と」「を」の四肢選択形式で作成した。問題の一部を(7)に示す(調査では太字なし)。

- (7) a. つくえの上() おいてあるりんご() もらってもいい? (「位置~+に」の問題例)
 b. れいぞうこの中() きのう買ったパンがかたくなっている。(「位置~+で」の問題例)
 c. 学生会館() アメリカからの留学生が10人とまりました。(「地名~+に」の問題例)
 d. 金さんは12才から東京() 育ったので日本語が上手です。(「地名~+で」の問題例)

(8) 「に」と「で」の調査における正答率



4-3 調査の結果

結果は(8)の通りである。

母語・名詞の種類・「に」と「で」の3要因の分散分析による統計処理を行った結果、母語の違いによる差は見られなかった ($p > .05$)。したがって、場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分けには母語の影響はほとんどないと考えられる。

さらに、名詞の種類、つまり隣接する名詞との組み合わせを要因として分析を行った結果、「に」と「で」の正答率は隣接する名詞が位置を表す名詞か場所を表す名詞かの違いで有意な差が見られた ($p < .001$)。このことは、学習者が隣接する名詞と固まりを作って助詞を選択する可能性が高いことを示唆している。

5 「に」と「で」の使い分けの要因

調査の結果から、「に」と「で」の誤用が多いのは、「位置を示す名詞(例 中・前)+に」「地名や建物を示す名詞(例 東京・食堂)+で」の固まりを形成し、後続の動詞を考慮することなく助詞を選択するためであると考えられる。このような固まりで処理する方法は、日本語学習者の特有の現象ではない。英語学習者の冠詞の習得にも同様の傾向が観察され(Heubner 1979)、aとtheの使い分けに接続する名詞の特徴が関係していたことが報告されている。また、三人称単数の's'が固有名詞の場合より代名詞の場合の方が正答率が高く、学習者が'he/she verb+s'のような固まりで使用している可能性が高いという報告もある(Ellis, 1988)。これらの言語処理のストラテジーは、学習者が形態素や語の使用の際に、前後の意味の分かる語との固まりで覚えてしまうこと

に起因するのではないかと思われる。Takahashi(1984)は、日本人中学生を対象としたテストで' Do you () the music out there? They are having a party or something.'のような場合、the musicの語からすぐに'listen to'を連想してしまう学習者が多いことを報告している。

これらの事例から、本研究の結果も含めて、学習者が、ある習得段階ではそれ自体あまり意味を持たない格助詞や冠詞を、隣接する名詞と共に一かたまりの語としてとらえていることが推測される。一かたまりの分析できない表現としては、英語では'How do you do?'や'That's a〜'などの定型表現(formulaic speech)が学習初期に使用されることが報告されている。学習者は格助詞や冠詞のような機能語の選択を迫られた場合に、その近くにある語の意味や機能に依存して一かたまりの固定した語(ユニット)として扱って覚えてしまうユニット形成のストラテジー⁹をとるのではないだろうか。今回の研究では、「に」と「で」が「前」や「大学」などの名詞と固定化の現象を起こし、それが一つの傾向の名詞群(位置を表す名詞群など)によってユニットを形成していることが推測された。したがって、このようなユニット形成のストラテジーが学習者の誤用を産み出す原因の1つであることが示唆される。

6 おわりに

本研究によって、場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分けに関して解明すべき3点の課題が明らかになった。

まず、日本語学習者の母語の違いによる影響は見られず、誤用にも正用にも学習者に同様の傾向があることが分かった(課題①の結果)。

そして、使用例の分析や調査から「場所を示す名詞+に」や「地名・建物を示す名詞+で」の固まりを形成している可能性が高いことが分かった(課題②の結果)。

そして、上記の結果によって、それ自体あまり意味を持たない要素は、近隣の語と共にひと固まりの語(ユニット)として扱うという学習者のユニット形成のストラテジーが推測され、それが誤用を産み出す原因の1つであることが考えられる(課題③の結果)。

このような固まりで処理されるユニット形成の現

象は、前接の名詞と助詞の場合だけでなく、動詞と助詞の可能性もある。久保田(1994)も、格助詞「へ」は動詞「行く」が近い距離にあると正用が出現しやすく、遠いと誤用になると述べているが、この点は動詞と格助詞のユニット化が推測される。「*部屋に友だちは3人がいます。」や「*忙しいになります。」などの誤用は、「へがいます」「へになります」で覚えている可能性が高い。

今井(2000)は、学習者の格助詞の使い方を調査した結果、「*小さな子どもは親(が)甘えるものだ。」「〜生活(が)困っている」「〜結婚(を)賛成しなかった」のような誤用例から、「ヒト名詞+が」、「が+自動詞」、「を+他動詞」のような固まりを形成していると報告している。

今後の課題としては、これらの動詞と助詞との固まりのストラテジーをとる場合は存在するのか、他の文法項目の習得にもこのようなストラテジーが作用しているのか、さらにレベルが進むにつれてこのストラテジーはどのように変化し、習得に影響を与えるのかを明らかにしなければならない。

本研究を行うことによって分析の観点を研究者の視点から学習者の視点へ転換することの重要性にも気づかされた。従来の習得研究では、文法項目を取り扱う場合、研究者が分類した用法や教科書の分類用法による調査項目で調査が行われていることが多い。しかし、今回の調査結果から、学習者は学習者自身の言語処理のストラテジーで使い分けの分類をしていることが推測される。頻度や正答率の量的分析だけでなく、言語環境や機能・使用状況などを見渡した幅広い観察が必要であろう。今後も上記の点に留意し、学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジーを発見したいと考える。

付記：本稿は平成10年度日本語教育学会秋季大会での口頭発表を加筆修正したものである。

¹ 過剰一般化とも言い、ある規則をその規則が当てはまらない語や句などに、広く適用させてしまうこと。この場合、場所を表す格助詞には「に」と「で」があるが、場所を表す場合のすべてに「に」を使ってしまうという現象を意味する。

² 調査対象の学習者は調査開始時期において19歳〜24歳、男性2名、女性4名で、同じ日本語学校で1年間学習し、その後日本の大学や専門学校へ進学した。

対話調査は、特定の文法項目を誘導するものではなく、設定されたテーマの自然会話を収集した。

³ 迫田 (1998) は、学習者の最も習得困難な「ソーア」の誤用 (例*素敵な人が現れたら、あの (一その) 人と結婚したい) の原因は、学習者がソ系とア系の指示詞の使い分けを「ソ系指示詞 (例 その・そんな) + 抽象名詞 (例 こと・場合)」「ア系指示詞 (例 あの・あんな) + 具体名詞 (例 人・先生)」のパターンで行っていることに因ると報告している。迫田 (1998) では、このようなストラテジーを「パターン形成」としているが、本研究では「ユニット形成」と呼ぶ。

⁴ 先行研究の「に」「で」の誤用例の名詞句全てが、表に示したような分類に該当するわけではないことを明記する。(例) *いま二か月福岡を住んでいます。(福間 1997:67)

⁵ 「地名・建物を示す名詞」という分類は、これまでの資料から「に」「で」の正用・誤用例の名詞を概略的にまとめた結果の捉え方であり、例としては「会社・会館・寮」等がある。しかし、「二階・広場」等はどちらに属するのかなど、詳細な分類に関しては問題点が残る、さらなる検討が必要である。

⁶ 大島 (1993) は、「白い雪の上 (に/で) 黒いカラスが死んでいた」のように、叙述の重点の置かれ方によっては両者とも使用可能と指摘している。

⁷ 学習者は大学および日本語学校の留学生であり、レベルに関しては所属機関の教師と相談し、日本語能力試験認定基準をもとに該当クラスを選定した。

⁸ 「その他」の群の学習者の国籍と人数は、次の通りである。アメリカ7名、オーストラリア2名、タイ・シンガポール・カナダ・フィリピン・マレーシア・インドネシア・トルコ・イラン・スイス・オランダ・ペルー各1名。

⁹ 迫田 (1998) ではパターン形成と呼んでいるが、本研究では1つの固まりとして処理されるという観点から「パターン」より「ユニット」として捉えるほうが妥当であると考え、「ユニット形成」と呼ぶことにする。

参考文献

石田敏子 (1991) 「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号 pp. 64-77. 日本語教育学会

市川保子 (1997) 『日本語誤用例小辞典』凡人社
井内麻矢子 (1994) 「初級日本語学習者を対象とした助詞の縦断的習得研究」修士論文 お茶の水女子大学大学院

今井洋子 「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—『日本語教育』105号 pp.51-60 日本語教育学会

大島中正 (1993) 「動詞述語文における場所名詞の二格とデ格」『同志社女子大学 学術研究年報』第44巻 IV pp. 28-50. 同志社女子大学

久保田美子 (1994) 「第二言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号 pp. 72-85. 日本語教育学会

迫田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得—』漢水社

寺村秀夫 (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集(資料集)』(1985-89年度文部省科学研究費特別推進研究「日本語の普遍性と個性に関する理論的及び実証的研究」の分担研究)

福間康子 (1997) 「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』第8号 pp. 61-74. 九州大学留学生センター

八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に—」『世界の日本語教育』6号 pp. 65-81. 国際交流基金日本語国際センター

Ellis, R. (1988) The effects of linguistic environment on the second language acquisition of grammatical rules. *AL* 9/3, pp. 257-273.

Hakuta, K. (1976) A case study of a Japanese child learning English as a second language. *LL* 26/2, pp. 321-351.

Huebner, T. (1979) Order-of-acquisition vs. dynamic paradigm: a comparison of method in interlanguage research. *TESOL Quarterly* 13, pp. 21-28.

Takahashi, T. (1984) *A study on lexico-semantic transfer*. Ph. D. dissertation, Teachers College, Columbia University.